

報告 平安時代の鞠智城跡

報告者紹介

西住 欣一郎（にしづみ きんいちろう）

熊本大学大学院文学研究科修士課程修了。熊本県文化課で埋蔵文化財担当、
城跡調査主査、課長補佐を経て、現在、熊本県立裝飾古墳館分館「歴史公園鞠智
城・温故創生館」館長。専門は考古学。

報告 「平安時代の鞠智城跡」

歴史公園鞠智城・温故創生館長 西住欣一郎

皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました西住でございます。私のほうからは、「平安時代の鞠智城跡」ということで、ご報告をさせていただきたいと思います。本日は、パワー・ポイントを使いながら、ご説明をさせていただきたいと思います。よろしくお願ひいたします。

一、鞠智城跡の位置と環境

皆さんもよくご存じだと思いますけれども、ここが鞠智城ですが、九州には大宰府があつて、大野城、そして基肄城があります（図1）。それから、対馬に金田城があるわけですが、実は何でこういうふうに九州を、大宰府を守り、瀬戸内海沿岸にこういうふうにお城がたくさんできたかということをお話しします。

六六二年の白村江の戦いですが、朝鮮半島は高句麗・百濟・新羅という三つの国に分かれていたのですが、実は新羅が中国の唐と連合をして、百濟を滅ぼ





図1 古代山城の分布



図2 鞠智城跡の立地と構造

これは南のほうからみた鞠智城の航空写真（図2）ですが、非常に平ら、山城というわりには平らな場所が非常に

山城ですが、それらを唐と新羅の連合軍が入つてきそうなルート上にお城を築いて、防衛体制を整えていつたと、そのような流れになります。

してしまいます。百濟が、日本に応援を求めてきたので、日本から応援をするために、唐と新羅の連合軍と、この白村江で戦いを行うわけです。実はこれで負けてしまうわけです。この戦いがどれだけ大変だったかといふのを物語るものに、この朝倉宮というのがあるのですが、ここに当時の齐明天皇が天皇自ら最前線基地に来られたわけです。天皇自ら最前線基地に出てきた戦いは、この白村江の戦いが最初であつて最後じゃないかななど。それだけ重要な戦いであったということが分かると思うのですが、これで敗れてしまつて、次は唐と新羅が攻めて来るのではないかということで、朝鮮式山城とか、神籠石系山城、これらをまとめて古代

多いというのが、一つの特徴になります。この実線で囲った範囲がお城の範囲になります。非常に大きな城ですから、現在では山鹿市と菊池市、二つの行政区にまたがる、それぐらい大きなお城になります。

現在、分かっているところで、南側に深迫、堀切、池ノ尾というふうに三箇所の門があつて、自然の地形を利用しながら、崖で囲まれていまして、そこに部分的に土でできた壁をさらに造ります。それを土塁といふのですが、南側のところにこういう土塁線を築き、北側、西側のほうにも土塁を造つていくという、そういう補強をして防衛に当たつているというふうになります。

それから、本日、話をする上で大事になつてきますのが、この建物が集中するところです。ここに建物が非常に集中をしています。この話と、それから、ここ貯水池の話をしていきますので、こういう場所にあるということを、頭の隅に置いていただければというふうに思います。

今、お話ししました土塁の長さが約三・五キロ、非常に大きいです。それから、面積が五五ヘクタールの広さがあります。それから、古代山城というわりには標高が約九〇～一七〇m、一番高い所で一七一mです。そんな急峻な山ではなく、台地にちょっと毛が生えていくような感じと、そういう地形の中に鞠智城があるというふうに、ますご理解いただければというふうに思います。

二・発掘調査の成果

ここから二番目の項目に入つていきますが、これが鞠智城での発掘調査の成果、建物とか、どういう所で

生活の痕跡が地面上に残っているのですから、それを見つけて調べていくと中身が分かるという、そういうものを遺構といいますが、番号を付けているのが建物跡です。それから、貯水池跡。ここに非常に大きな、なんと五三〇〇平方メートル。非常に大きな池の跡を見つけております。それから、本日お話する中でもう



図3 発掘調査の成果

出でているかという図面を示しているところです（図3）。実は先ほどからお話しがありますように、一九六七（昭和四二）年から二〇一〇（平成二二）年まで約三二回の発掘調査を行つております。私も若いときに、現場に立たせていただいて、発掘調査の仕事をさせていただきました。それに基づいて、本日ここでお話をしているという、そういうような感じなのですが、自分で発掘したところをこうやって皆さんのお前でお話ができるというのはとてもうれしく、やりがいを持つて今からやらないといけないなど、気持ちを新たにしているところです。

実は、本日の話のなかで一番大事なところは、「主な検出遺構」としましたけれども、地面上に刻まれている昔の生活の跡のことを、考古学用語で「遺構」といいます。その

出でているかという図面を示しているところです（図3）。

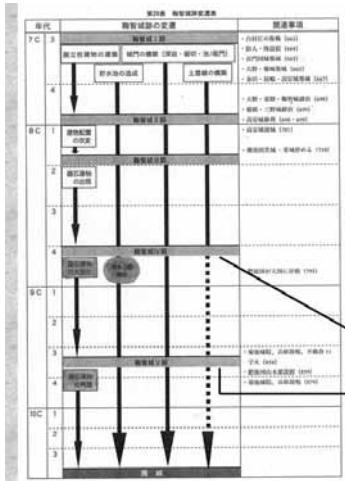


図4 鞠智城の時期区分

一つポイントになるのが、出てきている品物、「遺物」といいます。特に、皆さんがよく日常生活で使われる食器類がたくさん出てくるのですが、須恵器とか、土師器とかいりますけれども、そういう物も出ていますし、木簡とか百濟系の銅造菩薩立像という、そういう品物が出ています。

(1) 鞠智城跡の時期区分

熊本県教育委員会「鞠智城跡Ⅱ」
—鞠智城跡第8次～32次調査報告—
2012年 より

- ・鞠智城 I 期～鞠智城 V 期に区分
 - ・時期ごとの変遷を考察

今回のシンポジウム の対象となる時期

「遺物」といいます。特に、皆さんのがよく日常生活で使われたとか、土師器とかいいますけれども、そういう物も出ています。

(一) 鞠智城跡の時期区分

本日お話する中身は、二〇一二（平成二四）年に発行しました『鞠智城跡II』という発掘調査の総合報告書があるので、それにまとめた成果を基に、皆さんにお話をしているところです。

その中にⅠ期からⅤ期の時代区分をやつております(図4)。

それはここに示しているように、七世紀の第3四半期、一世紀を二五年ずつ区切って四つに分けるのですが、その三番目

のころ、七世紀の第3四半期ごろに鞠智城が造られて、実は一〇世紀の第3四半期、約三〇〇年間、鞠智城が存続しているということが、出土している遺物から言えます。先ほどの食器とか、そういうつた物です。その変化を並べていくと二〇〇年間使われているということが分かるわけです。それを使いながら本日お話を進めますけれども、私に与えられている題は平安時代になりますので、このIV期とこのV期、後ろから二つの時期がこの平安時代の鞠智城になります。ここに焦点を当

てて、本日はお話を進めたいたいと思います。

先程の図を、少し拡大をしているところ（図5）なのです
が、先ほども言いましたように、平らなところに建物がたくさん建つており、それから、貯水池。実はこのIV期になりますして、それまでは建物というのは地面上に直接穴を掘つて、その穴に柱を建てる掘立柱という建物が主だったのですが、このIV期になるとそうではなくて、基礎となる柱を建てる石の建物ができる、それも基礎石が非常に大きくなるという特徴があります。それから、その基礎石建物が実は一度、後で詳しく話しますが、この基礎石建物が一度壊れたのをもう一度立て

IV期・V期の様子

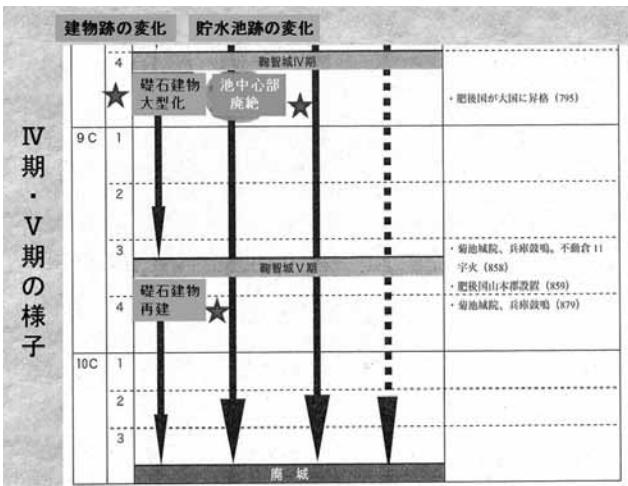


図5 鞠智城IV期V期の様子

直していると、そういう現象がV期になつて見られているということです。それから、池について見ますと、後でまた別の図面を出すのですが、このIV期になつて池の中心部が廃絶といいますか、使われなくなるという、そういう事実が分かりました。何でそうなつたのか分からぬのですが、想像たくましく考えてみようと思います。

(二) 建物跡の変化

これがその建物跡を具体的に見たところです(図6)。



図6 鞠智城IV期の建物跡

これは平安時代の最初のほうに当たりますIV期、八世紀の第4四半期から九世紀の第3四半期に当たる部分、ちょっと難しい言い方をしていますけれども、八世紀の終わりから九世紀の終わりというふうに簡単にいうこともできます。その黒く塗つて表示しているところが建物で、構造が不明な一棟を含め一六棟の建物がもう見つかっていますが、種類ごとに分かれます。先ほど言いましたように、この地面にそのまま柱を建てる、これを掘立柱というふうにいうのですが、掘立柱の建物も側柱と総柱に分かれます。側柱というのは建物の周囲だけに柱を立てて、総柱というのは、中のほうの床を支え



60号建物跡(発掘調査時):掘立柱建物(北から)

図7 60号建物跡

るための柱もあるという建物になります。それから、礎石の建物が九棟、礎石の建物か分からぬのが一棟あります。それから、礎石建物と掘立柱を同じ建物に併用している建物、そういう珍しい建物があります。こういう種類の建物があるのですが、その中から代表的な建物を今から見て行きたいと思います。

これが六〇号建物といって、掘立柱建物です（図7）。人が建つてあるところに柱が建つということで写真を撮っていますが、柱を据えるために穴を四角に掘つていくのですけれども、その跡がこの四角になつてゐるところです。柱の中央に丸く書いていますけれども、これがその柱を建てた跡で土の質が違つたり、色が違つたりするものですから、ここに木の柱が建つていたのだな

というのが発掘調査で分かるわけです。

写真を見ていて、皆さん、少し普通の発掘調査とは違うな、どうして全部掘らないんだというふうに思われていると思うのですが。実は、発掘調査をするというのは非常に格好はいいのですけれども、発掘調査をすることでの遺跡が壊れてしまうのですから、必要最小限度の事実をつかんだら、もうそこで発掘をやめて、これを埋め戻して後世に残していくこうということもとても大事なことになります。

皆さん、発掘現場に行かれたりとかすると、普通だつたらこれ

は全部掘つてしましますよね、柱の建つているところを。それをせずに、こういうふうに残してあります。学問がどんどん進んでいきますので、将来また考古学の学問が進んだときに、再調査ができるような状況にして今保存をしていると、そういう状況になります。これからお見せする写真は、そういう写真が多いもので、なんか中途半端な発掘だなど感じられるかと思い、それはそうではございませんので説明をさせていた

だきました。それだけ貴重な物だから、最小限度の発掘で成果を上げて、あとは後世に残していくこと、そういう気持ちで調査をやっているというふうにご理解いただきたいと思います。

それから、これが先ほど言いました礎石建物で、五九号建物跡です（図8）。五九号というふうに、見つかった物に見つかった順番に番号を付けていくわけです。実はこの建物を見ていただくと、周りに溝が巡ることが特徴です。これは湿気対策といいますか、侵入といいますか、そういういたものから守るために特別に区画を設けた建物になります。

柱が建つていた場所に人が立っているのが五九号建物の礎石ですが、実は皆さん、他にも石がありますよね。これは何



図8 59号建物跡

だろうというふうに思われていると思いますけれども、実はこの建物が建つ以前の建物の一部が、古い建物がここに一部見えているわけです。ですから、この五九号建物を掘つてしまわないと、下の建物が分かれません。ですが、これ以上掘つていなくて、これで調査が終わっているわけです。建物があるというのだけ確認してやめています。

それから、溝の部分です。溝の部分が一箇所だけ、溝を掘つていません。これは、わざと溝を掘り残して、通路として使つてているのではないかというふうに考えているのですが、立橋部といいます。ですから、この建物はこちらのほうから入つていくということだと思います。この部分におそらく入り口の扉があるので、ここを通路として残しているのではないかなど思います。

皆さん、もうお気づきでしょうか、手前の、小さな石は何だと思われますか。建物とは関係ないところに小さな石がありますよね。これは現場でいろいろと考えたのですが、ここに入り口があるのであれば、これは高床式の建物になりますので、扉は高い場所にあるわけです。ですから、ここにハシゴをかけて登つたのではないけど、そういうことを想像しています。発掘調査でハシゴは出てきませんでしたが、それを支える多分何らかの石だらうということで、そういうことを発掘現場で考えました。これは、ちょっと当たつているかどうかは分かりませんが、非常にその可能性は高いのではないかというふうに思います。

これが先ほど言いました非常に珍しい建物で、掘立柱と礎石が同じ建物に使われている掘立柱・礎石建物併用の建物になります（図9）。非常に構造が分かりにくいので、これを思い切つてこういうものではない



11号建物跡(発掘調査時): 振立柱・礎石併用(北東から)

図9 11号建物跡



12号建物跡(復元平面明示): 振立柱・礎石併用(南から)

図10 12号建物跡 (復元平面明示)

かなというふうに遺構を表示したのがこれになります(図10)。周りに掘立柱が巡って、真ん中に礎石の建物があるという、非常に珍しい建物です。こだけではなくて、本日後ほどお話をあるかと思うのですが、大野城の中にもこういう珍しい建物を類例として挙げることができます。

次に、IV期の後、V期です。V期は九世紀の第4四半期から一〇世紀の第3四半期までですが、ここで黒く塗っているのが建物です(図11)。ここに四棟、ここに一棟あります。これらはすべて礎石の建物、総柱の建物で、五棟見つかっています。先ほど、IV期では建物の礎石が大きくなり、V期で立て直しがありますということをお話したかと思います。その証拠を今からご報告をしたいと思います。

これは五六号建物(図12)ですが、火災後に建て替えをやっています。何で火災かということが分かるかということを後で説明します。建物の柱が建っているところに人が立っていますが、人が立っていない少し違う石があるかと思いますけれども、これはこの建物よりも一段階古い時代の建物の礎石が、表面に見えて

いるというふうにご理解いただきたいと思います。それが何で分かつたかといいますと、土層の堆積を見るために少し部分的に、人工的に深掘りをして土層を見ております。それを今から説明します。

これが、建物のあるところに、下図の C → D のところを深掘りして、土層の状況を見たところで、それを断面図で示しているのが上のほうになります（図13）。整地 I 層としている部分が、五六号建物の礎石を据えるために整地をした跡になります。礎石の建物を建てるときに、きちんと一度平らにして土を固めた上に礎石を乗せるものですから、その痕跡が整地 I 層になります。これをさらに先ほど言いました小さな石が



図11 鞠智城V期の建物跡



図12 56号建物跡



図13 56号建物跡堀断面

ありますよと、この五六号の下層建物というふうに名前を付けていますけれども、それがその下の、この黒く見えている部分に部分的ですけれども、こういうふうにあるわけです。

それに伴う形で、ここで a 層・b 層としていますが、ここに焼けた土が確認されました。焼けた土というのは真っ赤になるので分かります、それから、炭化したお米。炭になつたため、腐らずに残るわけです。ですから、この建物はお米を貯えていた倉だということがこれで分かるわけです。焼けた土と炭になつたお米ということは、この建物が火災に遭っているということが理解できるわけです。この建物、IV期の建物ですよね。先ほど言いました五六号、この下層建物が火災で焼失したものですから、V期になつて建て替えをしたということになります。

何でこういうふうに建て替えをしたかというのは、鞠智城のお城の性格にもよるのですが、火災に遭つたところにまた大きな倉を立てる必要があつたわけです。それは一つ、鞠智城の性格といいますか、機能を表しているのではないかなどというふうに思います。

(三) 貯水池跡の変化

次に、貯水池のお話をします。これは貯水池のイメージ図（図14左）ですが、ここが水をくむ場所。ここが非常に珍しいんですけれども、建築をする材料を貯えている場所。池頭と池尻部の差が約八メートルぐらいあるのですから、水を貯えるのには、一度に貯えることはできませんので、この絵では二箇所で仕切っていますけれども、何箇所かに仕切つて水を貯めていた場所があります。飲み水をくむ場所、それから、次

機的なことですぐにでも造らなくてはいけない、すぐにも修理ができるような状況をつくっているのです。わざわざそこから木を集めても間に合いませんので、いざというときに修理ができるよう建築材を貯えている、そういうのが見つかっています。古代山城の中では、今のところ鞠智城だけにしか見つかっていないという、そういうとても貴重な跡になります。

この表ですが、池の中心部と池尻部では少し終わり方が違うのですから、それを示しております（図15）。



図14 貯水池跡

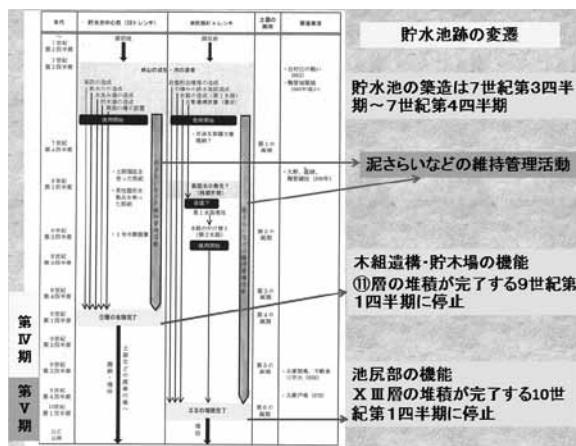


図15 貯水池跡の変遷

の区画が建築材を保管する場所といったふうに。

これがその建築材を保管する場所の写真

（図14右）ですが、実はお城で使う建築材を保管しているものが見つかっているわけですね。だから、非常に危

池はだいたい七世紀の後

半に造られているわけな

のですが、実は池とい

るのは皆さんよく分かって

いますけれども、堆積物

を除去しないと、どんど

ん土がたまつていって維

持ができなくなります。

それでいろいろな維持管
理をするためには、泥さ
らいなどの活動をしてい

くわけです。それをやめたというのがこの堆積で分かるわけです（図16）。この木組遺構とか、そういうものももう機能しなくなつたので、維持管理をしなくなり、その上に土が重なつていきます。それで一〇世紀には終わつてしまふわけです。

この図をみてみると、実は⑪層がでこぼこしていまして、これは泥さらいをした跡なのですが、その上の層、⑩層が堆積するということで、廢絶される。もう維持管理はしなくなつたということが証明できるわ

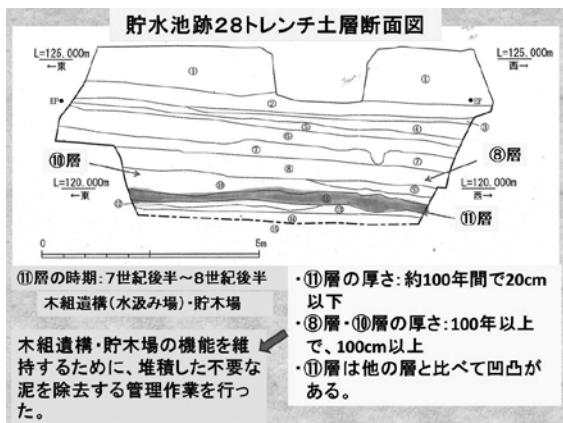


図16 貯水池跡28トレンチ土層断面図

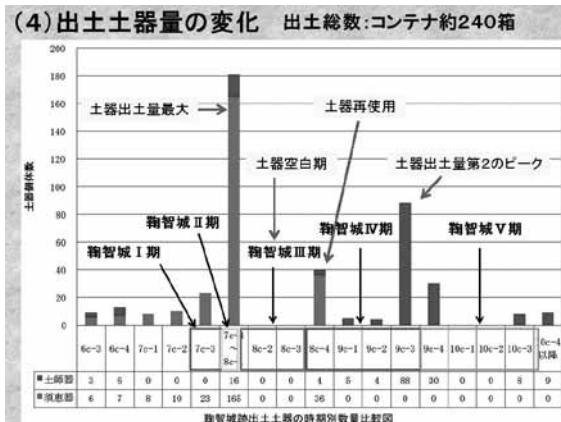


図17 出土土器量の変化

けです。それがⅣ期になるわけです。ですから、お城の性格でもう建築はいらなくなつたので、池のことを管理しなくなつたとどいことがいえるかと思ひます。

(四) 出土土器量の変化

これが最後になります。実は出土遺物が変化をしていきます(図17)。これを見ると、Ⅱ期が一番最大になります。それから、土器が全然出なかつた時代がⅢ期。それから、Ⅳ期になつてまた土器を使い始めます。それから、このⅣ期の最後になつて第二のピークが来るという。この土器の遺物の出土量を見ると、ここでもお城の機能を考えていく上の、一つのヒントが隠されているようになるかと思ひます。

どうもありがとうございました。